

公民館講座紹介(こども硬筆講座)

講座紹介シリーズの第3回は、9月18日(木)に開催されたこども硬筆講座の様子を紹介します。この講座は、週1回のペースで開催されており、講師は、徳裕子さんです。先生は、大和村の教育委員としても活躍されています。

この講座の対象者は、小学1年から小学3年生で、現在19名の児童が参加しています。

取材した日は、10月に行われる硬筆認定試験に向けての練習の日。児童の皆さんは、学年別の課題文に一生懸命取り組んでいました。また、講師の先生から、中心線を意識して書くことや、鉛筆の正しい持ち方等、一人一人親切丁寧にアドバイスを受けていました。

集中して字を書く練習をしながら、少しずつ自分の字が上達する喜びや達成感を感じている様子が素敵でした。

熱心に取り組む児童の皆さん



毎月19日は『育児の日』
第3土曜日は『青少年育成の日』
第3日曜日は『家庭の日』



本(ふん)の読(ゆ)む果てやねん?

知ってるようで知らなかった『六調』

「♪ここは重富 越ゆれば、吉野 吉野越ゆれば 鹿児の島」。これは何の歌詞だと思いますか?

これはみなさんよくご存知の、そうです宴会の最後にみんなで踊る『六調』の歌詞の一節です。「えっ?!」と驚かれた方や踊ることに夢中になり歌詞は知らないし、きちんと聞いたことがないという方も多いのではないのでしょうか。この節は参勤交代の時に使われた始良市の「白銀坂(しらかねざか)」を唄ったものです。私も何度か登り下りしましたが大変な急坂できつかったことを思い出します。

今回は、『奄美六調をめぐって』～徳之島から～(編者：山下欽一、小川学夫、松原武実[海風社]1990年発行)から『六調』についていくつか印象に残ったことを書きます。

- ◆島で「六調」とは、「三味線・太鼓(チヂン)・歌・踊り・囃子(はやし)・指笛」の6つを言うとも聞かれますが、そうではなく南九州各地の祝い唄であった「六調子」という歌で、それが奄美に渡って、歌い方を奄美的に変化させたものである。踊りは元々あって、そこに「六調」という歌が伝わったために踊りにも「六調」という名前がついたのではない。「六調」は「六調子」と「ハンヤ(or ハイヤ)節」とは兄弟姉妹と考えていいし、「牛深ハイヤ節」は奄美六調が再上陸して生まれた。
- ◆「六調」の詩型は、奄美本来の詩型(ハハハ六調)ではない七七七五調のいわゆる近世小唄調のヤマトグチの歌詞が歌われているのが特徴で、島唄にはない「ヨイヤナ」というハヤシ言葉が必ず入っている。奄美では、薩摩のように歌だけの「六調」は存在せず、あくまで踊るための歌である。ですので、ヨイヤナ系と分類されている。
- ◆人々のリズム感は日常生活の体の動かし方、特に下半身の動かし方が基本的に影響するという。本土では水田稲作が主たる仕事だったので、重心は低く、腰を曲げて両手を交互に動かす。これに対し、奄美や沖縄ではサバニのように細い小舟に乗っての漁の時に海に落ちないようにと海洋民的な波に乗るリズムを自然に身につけたのではないだろうか。だからリズムも本土では定まっているのに対し、奄美・沖縄では型もリズムも自由で即興的に自分自身でつくる。
- ◆沖縄本島には「カチャーシー」はあるが「六調」はない。しかし、奄美からの開拓団がもち込んだ八重山諸島にはある。ちなみに沖永良部島や与論島にも「六調」はない。沖縄本島にはすでに「カチャーシー」の曲がたくさんあったので、あえて「六調」を使う必要がなかった。
- ◆「阿波踊り」は、足の運びができれば踊れるといわれ、お盆で帰ってきた祖先の御霊を村境まで送る踊りである。だから、奄美の「六調」では手で(神を)招くようにするのに対して、「阿波踊り」は足を後ろに蹴り上げ、手で押し出すように踊る。しかし、本来は「六調」同様自由だったのが、地域興しの目玉として盆踊りの振りをショー化し、名称も「阿波踊り」とした。女は腰を落とさず、ただきれいに伸びやかに踊るのに対し、男は力を誇示するために腰を落として踊る。
- ◆島唄の研究の第一人者である小川学夫氏は、「シマの六調ほど自分の気持ちをストレートに表現できるこれ以上の踊りは滅多にあるものではない、と自信をもっていただきたい。よそのものとの比較によってあらぬ劣等感を持ったり、またそれに迎合するというのは、一番奄美のために危険だなあと感じます。」と語っています。

※「六調」は踊るものであって、観るものではありません。ぼーっと観てたら、〇〇に叱られますよ!